

肺炎球菌薬剤耐性遺伝子変異別の成長曲線の違いについて

伊藤 真人 古川 侑

金沢大学耳鼻咽喉科

近年耐性肺炎球菌の蔓延が問題となっているが、臨床分離株に占める遺伝子変異別の検出頻度には明らかな偏りが見られる。検出頻度の高い変異型には、細菌の発育速度の違いなどの原因があるのだろうか？我々はpbp遺伝子変異と、mefA, ermB遺伝子の組み合わせ別に、吸光度計を用いて培養開始から24時間目までに、初期値 (OD), 増殖開始までの沈滞時間 (h), D.B.T (min), Peak到達時間 (h), Peak値 (OD), 定常値 (OD) について比較検討をおこなった。その結果、肺炎球菌標準株 (ATCC6303) と非耐性臨床株 (PSSP 8) の間に差はみられなかったが、臨床株間では、PSSP 8 とPISP (2 b, mefA) 株との間に、8,10,12時間目において、沈滞時間, D.H.T, Peak到達時間に有意な差が見られた。またPSSP>PISP>PRSP, mefA株>非mefA株, 非ermB株>ermB株の順で早く成育する可能性がある。PISP (2x), PISP (2x+2b,mefA) は、増殖開始が早かったが、Peak値と定常値に差は見られなかった。以上より肺炎球菌臨床分離株の検出頻度の違いが起きる要因として、沈滞時間とD.B.Tがあると考えられた。